

我輩の智識吸収法

大隈重信



大隈は耳学問だろうと言うものがある

日々幾十人の人に面接しているから、大隈は耳学問だろうというものがあるようだ。実際耳学問であるか、そうでないかということは、まだ確と考えてみたことはない。また考えてみる必要もなかったが、とかく耳の方で聞いたのは、碌な学問になつていないことは事実だ。

一体学問というものは、目でも耳でもいずれでも出来るはずのものに相違ない。学生は主として耳で学問をしている。彼の教場に於て講師の講義を聞くというものは、これこそ真の耳学問である。そこへ行くと我輩は、耳学問の出来ぬ方の性質だと思ふ。というのは、我輩は元來剛情で短気で、なかなか人の話を聴いているのは間だらしくて堪らぬ。それも人の話を聴いているのは間だらしくて堪らぬ。それであるから対手が誰でもかまわぬ、御先にご免をして、此方からさつさと独りで話し出すのである。

我輩は種々な方面の連中に会う機会が多い。まず日に随分種々な連中が見える。それだから耳学問を

やろうと思えばそれは出来そうにもあるが、ところが今言つた通り我輩が人の話を聴かぬから耳からの学問はあまりない。しかし我輩は全く耳を使つておらぬというのではないが、ただ使うのは口ばかりだ。それでは耳の学問でもなければ、また目の学問でもなく、口の学問になつてしまう。まずこんな風であるから、我輩は考えてみた訳でもないが、耳からはあまり学問してまいと思ふ。

しかし我輩は耳はあまり使つておらぬ

それで、海外からの新帰朝者の土産話は、大いに耳学問になるだろうという人がある。それは此方注意して聴いていたならあるいは耳学問になるかも知れないが、我輩が土産話も聴きはしない。土産話をしに来ると此方から逆に海外の話を聴かしてやる。我輩の談が果して「当つて」いるかどうかは知らぬが、構うことはない。洋行帰りの先生に海外の話を聴かしてやる。こんな調子で御土産はとんと頂戴はせぬ。頂戴しないどころではない、御土産に

鬚斗のしをつけて返してやるのだ。

ところで若い時分はどうであつたかというに、若い時分から我輩は剛情張りで、人の話などは聴かなかつたのである。なんでも二十三、四の頃からは独りで先生気取りで盛んに講釈を聴かせて今日まで押し通して来たのだから、口は随分使っている。しかし耳はあまり使つておらぬ。

勿論暇さえあれば我輩は書物を読む

それなら書物は読んでおるか、勿論暇もちろぬさえあれば書物を読む。暇ひまさえあればその間酒でも飲んで騒ぐというようなことはしない。それよりか読書をする。また我輩は園芸に興味をもっているから、暇があればまず庭園を歩き廻つて見る。而してなお暇が得らるれば、今度は読書をするという風ふうにしている。実は智識をうまく活用して行くのである。

一体我輩のところへはあまり怜愍なものは来ぬ。それだから我輩が独りで話してやるのだ。こういう風であるからなんで人から智識などが得られるもの

か。よしまた如何に怜愍なものが来て、我輩が耳を傾けぬから駄目である。人の話は注意して聴いたらい。学問にもなるだろうが、我輩の如き短気な剛情者には耳学問は誠に不適當である。次に書物は読むべきものであることについて一言しておこう。

社会と遠ざからぬ様に読書が必要である

時代の進運というものは冷酷極まるもので、自分と一緒に駆けるだけの力のないものをば容赦もなく振棄ふりすててずんずん変転してゆく。見給みたまえ、一時は相当の声望信用あつて世上に持もて囃された連中でもないとはなく社会と遠ざかり、全然時勢後れの骨董物となりさがりて、辛からくも過去の情力によりて旧位置を維持している者や、その情力さえ尽き果てて、生きながら社会より埋葬せらるる如き悲境に沈淪ちんりんするものが多いのは、畢竟ひつじやうこの時代の進運に伴うべき気力と智識とが欠乏いやくしているからである。

されば苟も社会の表面に立ちて活動せんと欲する

ものは、政治家であれ、実業家であれ、教育家であれ、絶えず時代の趨勢すうせうせいに着目して、その消長変遷に
応ずるだけの新智識を収容するに努めねばならぬ。
それは勿論読書が必要である。

しかしなほほど読書が必要だからといっても、実
際社会に活動するものは繁劇多忙なる中に零細れいさいの
余暇を尋ね出してやるのであるから、日々書齋しやうさいに閉
じ籠こもつて、書籍と首くびつ引きをする専門学究の真似まねを
する訳には行かぬ。彼は実際の必要不必要に頓着とんちやく
なく、純然たる研究的態度を以て隅から隅まで穿鑿せんさく
するけれども、これは実際の必要を限度として大体の
智識を得るに満足せねばならず、彼は何処どこまでも書
籍を重位に置き、書籍の上に養われた眼目を以て社
会を眺め渡さんとするけれども、これは事実を本位
に置き、事実によつて教えられた経験の眼を以て書
籍みくだを看下みくださんとする双方のやり方が根本よりして
違つておるのである。

現代の青年にはこの悪い習慣がある

嚴格なる意味に於ていえば、この事実本位の読書
法は無むろん論變則的であるかは知らぬけれども、実際の
活智識を収容する上に於ては書籍本位のそれよりも
有効である。

我輩等の育つた旧幕時代には、各藩とも御儒者おんじゆしやと
いうものがあつて、読書講釈を専業とし、口癖のよ
うに修齋しゆさい平治へいぢを説いていたけれども、その言うところ
はただ書物の上の穿鑿せんさくにとどまり、毫ごうも実際に接
触しなかつたので何の役にも立たず、儒者といえは
呆痴あほう者の異名の如く思わせたものだが、今日の新学
問は無むろん論昔の儒学などと同日に論ずべきものでない
としても、学究先生が書籍本位の読書法は、ややも
すると実際にかげ離れて、空疎迂遠くうそいげんの弊へいに流れる傾
きがある。

其処そこになると実際の活動家が社会の事実により
て得たる経験と修練とを基礎とし、その力によりて
読書するのは直ただちに事実と思想、経験と理論とを
連結せしめて活潑潑地かつぱつぱつちの作用をなすことが出来る。

ただこの種の人が読書せざるを病とする。

一体我が国の青年には、至つて悪い習慣がある。彼等は学校にいる間は随分勉強もすれば読書もするが、足一度学校を去りて實際社会に出ると、書籍などは一切束ねてしまつて振り向いて見ず、その癖不健全なる娯楽には随分憂身を寔して、これがために身心の打ち壊れるを知らず、とかくする中、社会の進運に振捨てられて無用の長物となつてしまふが、いずれもそれほど六ヶ敷いことではない。新刊書なり新聞雑誌なり、時代の趨勢を知るものを備えて、業務の暇に新智識の吸収に努めたならどんなものであろうか。我輩は年老いたりといえども、まだまだ今の若いものなどに後れを取らぬつもりである。

底本：「大隈重信演説談話集」岩波文庫、岩波書店

2016（平成 28）年 3 月 16 日第 1 刷発行

底本の親本：「大隈伯社會觀」文成社

1910（明治 43）年 10 月 20 日発行

初出：「成功 第十七卷第三号」

1909（明治 42）年 11 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつくっています。

※〔 〕内の補足・注記は、編者による加筆です。

※本文冒頭の編者による解題は省略しました。

入力：フクポー

校正：門田裕志

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。